Title	19世紀アメリカ女性文学史におけるシンパシーとシスターフッド					
Sub Title	Sympathy and sisterhood in American women's literature in the 19th century					
Author	大串, 尚代(Ogushi, Hisayo)					
Publisher	慶應義塾大学					
Publication year	2022					
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2021. )					
JaLC DOI						
Abstract	本研究では、性差、人種、階級などの面で異なる属性をもつ人々、シンパシーという感情的紐帯によって結びつけられていく様子が、19世紀アメリカ女性作家の作品の中で描かれていたことを中心に考察することを目的としている。2021年度は、主にスーザン・ウォーナーの『広い、広い世界』(1850年)、マリア・カミンズの『点灯夫』(1854年)という孤見が登場する文学作品を取り上げ、シンパシーという感情がもたらす「絆」に基づく家族形成や、孤見という存在と「移動」の関係に着目した考察をおこなった。北評家ジェリー・グリズウォルドは、19世紀アメリカにおける児童文学には孤児文学が多いことを指摘し、アメリカと「子ども」(孤見)との相性の良さを議論している。グリズウォルドは、孤児とは、イギリスという親(母国)から独立した子としての植民地アメリカを表象するものとして議論しているが、アメリカの孤児文学における孤児にはその他にも着目すべき点があると思われる。ひとつには、孤児文学が多なととてが議論しているが、アメリカの孤児文学における孤児にはその他にも着目すべき点があると思われる。ひとつには、孤児文学のお約束であるが)新たな家族を手に入れる点である。シンディ・ワインスタインが指摘するとおり、血縁ではなくシンパシーによる精神的な結びつきを持った家族像が示される点で重要である。もうひとつ重要な点は、ウォーナーやカミンズの作品に登場する孤児は、移動を余儀なくされる存在となっているという点である。孤児は、新しい家族に出会うために、移動することが求められる。本研究では、19世紀半ばに孤児のであることをテレー、多数と孤児の関係性を考察した。家族を持たない子どもの移動は、子どもを労働者へと変化させ、カミンズの小説で示唆されるとおり、19世紀半ばに議論の的になっていた奴隷制の問題をも想起させる。ここにおいて、家族のない移動する子どもと、近代家族制度から排除された奴隷の身分に置かれた人々とが重なる。だからこそシンパシーによる新たな家族の構築の重要性がうかがわれるのである。11020年1,160とはのよいの状態によった。11020年1,160とはのよいのはいまがはいまればいまがよりまりはいまではいまがよりまないではいまればいまがまりましまいまではいまからはいまからはいまからはいまがまりまからはいまがまりないまがまりまないまではいまからはいまがまりまいまがまりまがまりますがよりますがよりますがよりますがよりまりますがよりまりまからはいまりますがよりますがよりますがよりますがよりますがよりますがよりますがよりますが					
	Significant role to show the importance of building a family through sympathy.					
Notes	significant role to show the importance of building a family through sympathy.					
Notes Genre	Research Paper					

保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 2021 年度 学事振興資金 (個人研究) 研究成果実績報告書

研究代表者	所属	文学部	職名	教授	補助額	300 (	<b>`</b> ^\ =	千円
	氏名	大串 尚代	氏名 (英語)	Hisayo Ogushi		300 (A) <del>1</del>	TD	

#### 研究課題 (日本語)

19世紀アメリカ女性文学史におけるシンパシーとシスターフッド

#### 研究課題 (英訳)

Sympathy and Sisterhood in American Women's Literature in the 19th Century

## 1. 研究成果実績の概要

本研究では、性差、人種、階級などの面で異なる属性をもつ人々、シンパシーという感情的紐帯によって結びつけられていく様子が、19世紀アメリカ女性作家の作品の中で描かれていたことを中心に考察することを目的としている。

2021 年度は、主にスーザン・ウォーナーの『広い、広い世界』(1850 年)、マリア・カミンズの『点灯夫』(1854 年)という孤児が登場する文学作品を取り上げ、シンパシーという感情がもたらす「絆」に基づく家族形成や、孤児という存在と「移動」の関係に着目した考察をおこなった。

批評家ジェリー・グリズウォルドは、19世紀アメリカにおける児童文学には孤児文学が多いことを指摘し、アメリカと「子ども」(孤児)との相性の良さを議論している。グリズウォルドは、孤児とは、イギリスという親(母国)から独立した子としての植民地アメリカを表象するものとして議論しているが、アメリカの孤児文学における孤児にはその他にも着目すべき点があると思われる。ひとつには、(孤児文学のお約束であるが)新たな家族を手に入れる点である。シンディ・ワインスタインが指摘するとおり、血縁ではなくシンパシーによる精神的な結びつきを持った家族像が示される点で重要である。

もうひとつ重要な点は、ウォーナーやカミンズの作品に登場する孤児は、移動を余儀なくされる存在となっているという点である。孤児は、新しい家族に出会うために、移動することが求められる。本研究では、19世紀半ばの孤児文学の背景に、チャールズ・ローリング・ブレイスが始めた「孤児列車」プロジェクトの存在があることを示し、移動と孤児の関係性を考察した。家族を持たない子どもの移動は、子どもを労働者へと変化させ、カミンズの小説で示唆されるとおり、19世紀半ばに議論の的になっていた奴隷制の問題をも想起させる。

ここにおいて、家族のない移動する子どもと、近代家族制度から排除された奴隷の身分に置かれた人々とが重なる。だからこそシンパシーによる新たな家族の構築の重要性がうかがわれるのである。

### 2. 研究成果実績の概要(英訳)

The purpose of this project is to focus on the works of 19th century American women writers in which people are bound together by emotional ties, not by blood ties, such as sympathy regardless of the differences in gender, race, and class.

In 2021, I focused mainly on Susan Warner's The Wide, Wide World (1850) and Maria Cummins' The Lamplighter (1854), the literary works featuring orphans, to examine family formation based on "ties" of sympathy, not blood, as well as the relationship between the orphan and mobility.

Critic Jerry Griswold points out that children's literature in 19th century America is full of orphans, discussing the affinity between America and "children" (or orphans). Griswold argues orphans as representing America as a child independent of its "Mother Country" (England), considering the historical background of the United States. There are, however, other aspects of orphans in literature that are worth noting. For one thing, orphans, following a literary convention, are supposed to acquire a new family. As Cindy Weinstein acutely points out, this is important because it presents a desirable family which is spiritually bound by sympathy.

Another important point is that the orphans in Warner's and Cummins' works have to have mobility: they are required to move in order to meet new family members. This study examines the relationship between mobility and orphans by showing that the "Orphan Train" project initiated by Charles Loring Brace was a possible background of mid-19th century orphan literature. The migration of children without families to the West transforms them into laborers, which, as suggested by Cummins' novel, also reminds us of the controversial issue of slavery in the United States. Here, the orphan without a family overlaps with slaves; both of them are excluded from the modern family system. Orphans in the 19th century American literature were, thus, given a significant role to show the importance of building a family through sympathy.

3. 本研究課題に関する発表							
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)				
大串尚代	旅する子どもたち――ウォーナー、カミンズ、孤児列車	日本英文学会関東支部 第 20 回大会	2021年11月				
大串尚代	文学とジェンダー	『人文社会科学とジェンダー』学術 会議叢書 29	2022 年 1 月				